

San Francisco Chronicle サンフランシスコ・クロニクル紙 2014.12.6

アートレビュー: ケネス・ペーカー (サンフランシスコ・クロニクル紙)

高島進個展—CHANDLER FINE ART— 2014 /11/8-12/30 (延長 -2015/1/31)

—批評和訳—

(抜粋)

TAKASHIMA は作品に用いる色の選択、配列、全体像の構成などをサイコロを振ってその出目で決めるようである。タイトルにつけられた不可解な数字にそれが伺われる。しかし、その作品はプロセスを見るとパフォーマンスそのものだ。

『Ia, (筆、インク、紙のためのドローイング) yang 2:1:3:』(2014)とタイトルのついた和紙(マルベリー紙)の大作品では、まず顔料インクをたっぷり含ませた筆を紙面右下のコーナーに持っていくことから始まり、フリーハンドで紙面の周辺をなぞり、インクが乾くにつれ線は薄くなり擦れていく。その後、できる限り最初の線の輪郭に沿って2番目の線へと筆を進め、そしてその内側に3番目というようにやがては紙面を埋め尽くすまで続ける。

TAKASHIMA にとって作品を決定づける唯一他の要素は筆を重ねるにつれ全体像のパターンとして正方形のスパイラルが見えてくることである。これは方向、濃度などが異なる形で彼の作品中で繰り返し見られる形式である。紙面の中心付近に何も施されない隙間を僅かに残す傾向も見られる。

『Ia... yang 2:1:3:』に関して特徴を上げるなら、繰り返し線をなぞることで生じる手の震えから山々の尾根を高い所から見るような形相が一面に刻まれていることである。作品の抽象性が限界まで明白となり、ごく近距離からではあるが信憑性さえも感じさせると言ってもよいだろう。

今回の個展では小さいキャンバスにメタルポイント・カラー・ジェットの新しい作品も見られる。そのうち何点かは、冷気の中で息がかかったようにゴールドやシルバーが微かに刻み込まれ陰を含んだ優雅さをたたえるものもあるが、紙に筆の作品に比べてインパクトに欠ける。

2014年12月5日